日本忠臣傳

特105
429

文盛堂編輯所編

發行 京都 榊原文盛堂 魚住書店

371
308

始

特105
429

大久保利通卿　　木戸孝允卿

西郷隆盛翁は明治創業の大功臣なり西南の役一度賊名を蒙りたれども是あより翁の本意にあらず　先帝陛下は後年其罪を赦させ給ふ因て茲に其肖像を掲ぐ但だ夫れ其名を本書「忠臣傳」中に収め得ざるを遺憾とす

伊藤博文公　　西郷隆盛翁　　乃木將軍

楠正成

藤原鎌足

三條實美公

岩倉具視公

豐臣秀吉

日本忠臣傳目次

○忠義の道……一頁
○日本武尊(上)——女裝して賊を討じ給ふ……五
(下)——神劍を揮つて蝦夷を征せらる……八
○同足——奸賊を誅し帝業を輔く……一一
○藤原鎌足——身を捨てゝ皇位を完うす……一四
○和氣清麿(上)——忠魂永く神位に登る……一六
(下)——
○同呂——死して王城の鎮護となる……一八
○坂上田村麻呂——配所に在りて君を偲ぶ……二一
○菅原道眞——勇斷元主の請を斥く……二四
○北條時宗(上)——
(下)——贈謚の如く元兵を壓にす……二六
○同成(上)——「今日の事一に卿の力なり」……二九
(下)——「嗚呼忠臣楠子之墓」……三二
○楠正成——
○新田義貞——至誠能く潮水を退く……三
○護良親王附村上義光……三八
○兒島高德——櫻樹に題して志を九天に奏す……四二
○楠正行——至誠純忠父の子なり……四四
○毛利元就——御即位の料を献ず……四七
○織田信長——皇居を造營し奉る……五〇
○豐臣秀吉(上)——光秀を誅して亡主の仇を復す……五三

2.1.29 圖書

○豐臣秀吉（下）――聚樂第に御臨幸を仰ぐ……五七
○德川光圀――尊王論者の魁となる……六一
○松平定信――恭謙以て禮を盡す……六三
○賴山陽――勤王論の基を立つ……六六
○高山彦九郎――三條橋上皇居を拜す……七〇
○蒲生君平――怒つて奸賊の像を鞭つ……七二
○僧月照――忠魂永く波間に入る……七四
○佐久間象山――國家の爲に一命を惜まず……七七
○吉田松陰――小塚原頭哀情多し……八二
○三條實美――中興の宏猷を贊く……八五
○岩倉具視――旋轉の偉業を贊く……八七
○木戸孝允――夙に心を皇室に傾く……九〇
○大久保利通――鴻業や復古に策す……九三
○北白川宮殿下――玉葉一片蕃地に墜つ……九五
○伊藤博文――望み一世に隆し……九八
○乃木希典（上）――愛兒の戰死を賞す……一〇一
○同（下）――一死以て君に殉す……一〇三

目次終

日本忠臣傳

文盛堂編輯所編

忠義の道

世界に國は澤山あります。けれども、建國以來三千年といふ久しい間、上に萬世一系の天子様がお在りなされて、下々の人民を子のやうにお可愛がり下され、人民は又、天子様を親とも仰いで、忠義の心が極めて厚く、君と臣の間柄の親しさ睦じさが、親子のそれにも優つてゐるといふ國は、我が日本の外には、世界の何處にもありません、眞に萬國無比であります。

これには何か原因がなくてはなりません。原因は何でせう。

他ではありません。甚だ恐れ多ひ言ひ方ではありますが、我が國に於ては皇室と人民とが其の血統を同じくして、其の間に切つても切れぬ親類の關係がある、即ち皇室は人民の宗家、人民は皇室の末族と、かういふ關係があるのであります。だから、一方からいふと君と臣であるけれども、一方からいへば親と子であります。君と臣との間が、親しく睦じく、人民皆な忠義の心に富んで、天子様のお爲め皇室のお爲めには、命を捨てゝも厭はぬといふ、其の原因は此に在るのであります。

今日の日本人は、凡そ五千萬人（朝鮮を加へれば六千萬人）もあります。然し太古に遡つてみると、こんなに澤山ゐた譯ではありません。瓊々杵尊が此の國へお降りなされたとき、つゞいては神武天皇が大和へお出でになつたとき、お供をした日本人は、極々僅かでありました。さうしてそれらの日本人は、皇室も人民も同じ血族の間柄で、皇室はたゞ其の中の宗家といふまでで

でした。それ故人民は宗家たる皇室をお助け申上げて、共々此の國を闢いたのであります。

然らば吾々今日の日本人は何でせう。今日の皇室が其の時の皇室、即ち瓊瓊杵尊、神武天皇の御子孫でおありなさる通り、吾々今日の日本人は、其の時の人民の後裔であります。即ち今日の皇室は、太古の皇室と同じく、人民の宗家にお在りなさるのであります。末族たる人民が、宗家たる皇室を敬ひ之を擁護ることに力を盡すのは、當然の義務であると同時に、又た自然の人情であります。

勿論日本人の中には、朝鮮人、支那人、アイヌ人、南洋人などの子孫も、多少は混つてをりませうが、それとても、何千年何百年といふ長い間には、皇室の末族たる純粋の日本人と幾度も婚姻を結んで、同じ血統の中へ混化つてしまつたのですから、これ亦た皇室の末族と謂つて可いのであります。

日本人が皇室に對して、忠義の心に厚い其の原因は、即ち右の點に在るの

であります。明治二十七八年の日清戰爭に於て、又た明治三十七八年の日露戰役に於て、日本人は其の厚い忠義心を表はしました。近くは明治天皇崩御の前後に於ても、やはり此の心を表はして、世界各國の人を驚嘆させましたが、吾々皇室の臣民たる者は、益々此の心を奪ひ起して、心に一日と雖も皇室を忘れず、一旦緩急のあつた場合には、身命を拋つて、君の爲め國の爲めに盡さなければなりません。

日本が支那に勝ち露西亞に勝つたのは、此の忠義心の爲ではありませんか我が國が盛になると衰へるとは、此の心の多少に因るのであります。吳々も戒めなければなりません。

就ては茲に、我が國古來の忠臣數十人を擧げて、其の人々が皇室に對して如何に忠義であつたかを、お話しやうと思ひます。之に依つて世の人の忠義心を勵ますことが出來るならば、其の人の幸福はいふ迄もなく、併せて日本の幸福であります。

日本武尊（上）——女裝して賊を討じ給ふ

日本武尊は人皇第十二代景行天皇の皇子であります。お生れなされたとき双生でありましたから、天子樣は兄を大碓、弟を小碓と名づけられました。此小碓尊が日本武尊で、初めは日本童男とも申されました。御幼時から御氣象が勇ましく、御成人の後は身長一丈にも餘り、力のお強いことは、誰一人かなふ者がありませんでした。

景行天皇の二十七年（一千八百十四年前）に、筑紫の熊襲が叛いて、天子樣の御命令に從ひませんでした。筑紫は今の九州で、熊襲はそこに棲んだ一種族であります。天子樣は其の時御年十六歲の小碓尊を大將軍として、これをお討たせなされました。

小碓尊は美濃國の人弟彥公などを引連れて、筑紫へお下りなされました。さうしてよく〳〵樣子をお探りになると、熊襲の長は川上梟帥といふ者で、

力は飽まで強く、然に眷族の者家來の者が澤山あつて、筑紫全部を我が手につけ、非常な勢でありました。

尊は思はれました。今、力を以て賊を滅ぼすことは難かしい。然し計策を用ひたならば、如何に強い梟帥と雖も、討取ることが出來るであらう。かう思つて、其の機をお待ちになりました。

すると一日のこと、梟帥は眷族共を大勢招いて、酒宴を開きました。尊は此の時こそと、女の裝をして、梟帥の邸へ忍び入り、婢女等の間に雜つてられました。梟帥は尊を美しい女とばかり思つて、喜ぶこと限りなく、酒を飲み過して、其の場に醉ひ臥してしまひました。

やがて眷族の者たちも歸り、婢女等もゐなくなると、尊は矢庭に梟帥を曳き据えて、拳を固めてドンと一突其の胸をお突きになりました。梟帥は大に愕き怒り、挑ねかへさうとしましたが、尊に壓へられてゐて、身動きも出來ません。苦しさうに藻掻きながら、

『汝は一體何者なるか、不屈者奴、名を名乘れ』。

と怒鳴りました。尊は答へて、

『我は天皇の皇子、日本童男である。御父帝には、汝が朝命に從はぬのを憤らせ給ひ、我を遣はして御誅伐あらせられる。汝の命は最早我が手のものであるぞ』。

と仰せられました。

梟帥は之を承はつて、

『日本廣しと雖も、吾に敵する者はない。然るに君の力は、遙かに吾に勝つてゐる。今より後は名を改へて、日本武と申されよ』。

かういつて、溫和しく討たれました。かくて尊が都へお歸りになると、御父景行天皇の御悅びは、一通りでありませんでした。

日本武尊(下)——神劍を揮つて東夷を征せらる。

日本武尊熊襲御征討の後十三年、蝦夷が叛きました。蝦夷は今のアイヌ人の先祖で、其のころ、關東奥羽の國々から北陸道東山道へかけて、繁衍つてゐたのであります。

景行天皇は今度は、尊の御兄大碓尊に征伐の任を命ぜられました。ところが大碓尊は、臆病な方であつたと見えて、宮中を逃げ出し、草の中へ匿れてしまはれました。天子様はひどく御立腹あらせられ、大碓尊を探し出して、美濃國へ追放られました。さうして復々日本武尊に東夷征伐の事をお命じになりました。

乃で尊は吉備武彦、大伴武日連などを引連れて都を出で給ひ、伊勢の神宮に詣でゝ、倭姫命にお暇を告げられました。すると倭姫命は、叢雲劍を尊に授けて、

慎しんで怠り給ふな』。

とお諭しなされました。

かくて駿河國に到らせられたとき、賊共は外面に降參の體をよそほひ、尊を廣野の中へ連れ出して、

『こゝで獵を遊ばされよ』。

と欺き、茫々と生へ茂つた草に火をかけて、尊を焼き殺さうとしました。尊は帶びさせられた叢雲劍を揮つて邊りの草を薙ぎ拂ひ、却て賊をお討取りなされました。今駿河にある焼津は其の古蹟であります。さうして其の後は叢雲劍を草薙劍といふやうになりました。

尊は進んで相摸に入り、更に上總へお渡りにならうとしました。ところが海が俄に荒れ出して、お船が今にも覆りさうになりましたので、尊の妃乙橘姫は海神の怒を宥める爲に、身を躍らして海へとお入りになりました。すると波風は忽ち止んで、お船は恙なく上總へ着きました。

それより海路を陸奥に進んで蝦夷を平げ、常陸、甲斐の國々を經て、信濃に入り給ふとき、碓氷峠に登つて東國を望み、乙橘姫のことを想ひ出して、

『吾妻者耶』。

と仰せられました。東國を「アヅマ」と呼ぶのは、此の事から起つたのであります。

尊は信濃から尾張へ出て、尾張氏の娘宮簀姫を娶り、久しくそこにお駐まりになりました。然るに近江の伊吹山の賊を討ち給うたとき、御病氣にかゝらせられ、伊勢の能褒野でお薨れになりました。其の時尊は、吉備武彦を都に上らせ、蝦夷平定の事を天子様にお報らせなされました。天子様は尊の功を賞すると共に、其の御病氣を傷ませられて、早速使者をお立てになり、尊の薨去をお聞になると、一方ならずお嘆きになりました。

尊の御年は、其の時三十二歳でありました。草薙劍は尾張國熱田の、熱田神宮に祀つてあります。

藤原鎌足——奸賊を誅し帝業を輔く

人皇第三十五代皇極天皇の御代、大臣蘇我入鹿は父の蝦夷と共に、朝廷を恐れぬ振舞が多く、果ては天下を覆さうといふ、大それた非望を起しました。かくと見た藤原鎌足は、大に心配しましたけれども、何分官位が低いので、手の出しやうがありません。乃で諸皇子の方々を見ると、中大兄皇子が一ばん智慧や勇氣の優れた御方でしたから、鎌足は此の御方を御輔け申上げて、蘇我氏を倒さうと、心ひそかに思ひました。

かくて鎌足は、中大兄皇子に近づき奉る機會を窺ひましたが、或る時法興寺に鞠の會があつて、皇子もそれへ參られましたから、鎌足は此の時こそと勇んで其の會へ出かけました。

會では皇子も鞠を蹴つて御遊びになりましたが、圖らず皇子の御履が脱げて、遠く飛んで往きました。其の場にゐた鎌足は、急ぎ御履を拾ひ取つて、

恭しく跪づいて奉りました。皇子は前から鎌足の偉いことを御知りになつてをりましたから、やはり跪づいてそれを御受けになりました。

これが御縁となつて、鎌足はよい鹽梅に皇子に近づき奉ることが出來、時時御目にかゝつては、蘇我氏を滅ぼすことの御相談を申上げました。尤も人に疑はれてはとの懸念から、表面は南淵先生の許へ學問に往くのであるといつて往來をしました。石川麻呂、佐伯子麻呂、犬養綱田なども、此の相談に與かりました。

神功皇后の三韓征伐以來、年々彼の國の使者が來て、貢物を上る例でしたが、皇極天皇の四年にも、やはり其の使者が來ました。朝廷では拜謁の式を御行ひになり、大臣入鹿を始め、大勢の官人が其の席に列りました。其の時三韓からの上奏書を讀んだのは、彼の石川麻呂でしたが、今日の謀計を知つて居りますので、心配の餘り、恐れ戰いて、讀む聲さへも明かでないのでした。入鹿はそれを見咎めて、

『何故そんなに顫へるのだ』。

と訊ねました。石川麻呂は答へて、

『天子様の御前ですから、畏れ多さに顫へるのです』。

と申しました。

此のとき鎌足は、子麻呂と綱田とに催促をして、

『早く入鹿を刺されよ』。

といひました。けれども二人は懼れて手を出しかね、たゞモヂ〳〵してをりますので、仲大兄皇子は手遲れになることを御心配になつて、自から鎗を取つて、入鹿を御突きなされました。入鹿は大に驚いて、天子様に御縋りしやうとしました。けれども鎌足が出て、一々入鹿の罪を列べ立て、嚴しく責めましたので、入鹿は一言の答も出來ず、其のまゝ誅に服しました。

中大兄皇子は皇德、齋明の二帝十七年を經て、天皇の御位に御即きになりましたが、其の間鎌足を輔佐者として、色々政治上の改革をなされました。

鎌足は天智天皇の八年（一千二百四十餘年前）に死にましたが、其の時天皇は鎌足の病床に御臨幸になつて、姓を藤原と賜ひ、大織冠の位を御授けなされました。鎌足の姓はそれまで中臣といつたのであります。

第一節　和氣清麿（上）——身を捨てゝ皇位を完うす

今を距ること一千百四十年ほどの昔し、稱德天皇の御代に、由削道鏡といふ惡い僧が、宮中に出入りして、大層天子様の御寵愛を受け、太政大臣禪師から法王の位に進み、行列の時の乘物供廻りは勿論、其の他平素の生活振りは、天子様と少しも變りがなく、實に素晴らしい勢ひでした。

乃で道鏡に諂ふ者が、澤山出て來ましたが、中にも宇佐八幡の神官阿蘇麿といふ不屈者は、八幡神のお告げと僞つて、

『道鏡殿を天皇の御位にお即かせ申したならば、天下は太平に治まりませう』。

と、飛んでもないことを言つて出ました。

天皇の御位を臣下の者に授けるといふことは、日本開闢以來、未だ例のないことであります。道鏡を御寵愛になつてゐた天子様も、こればかりは聽屈けかねて、今一度八幡神の仰せを伺はせることゝし、其の使には、和氣清麿をお遣はしになりました。

清麿は備後國の人で、姉の廣蟲と共に朝廷に仕へ、氣象のしつかりしてゐた上に、忠義の心に富んで、天子様の御信任も深かつたのであります。

然樣な人でしたから、上を侮る道鏡の我がまゝな振舞を、常々心憎く思つてをりました。で、今度使の役を承はつたを幸ひに、是非道鏡を除かなければならぬと、早くも心を定めました。

だから清麿の朋友で、元と道鏡の師匠であつた路豐永といふ學者が、

『萬一道鏡が天皇の御位に即くやうなことがあつたらば、私は面目次第もないわけ。何の顏下げて此の世に生きてゐられやう、死ぬより外はありません』。

と心配した時に、清麿はキツパリと、

『決して御心配なさいますな』。

かう答へました。

和氣清麿(下)——忠魂永く神位に登る

やがて出發の時となると、道鏡は清麿を呼んで、

『汝若し我が望を叶はせたならば、我は汝に太政大臣を授けてやる。然うでない時には、重い罰を加えるから、心得違ひのないやうに氣を附けよ』。

こんなことを申しました。

乃で清麿は宇佐八幡へ參詣をし、都へ歸ると直ぐ、道鏡を初め大勢の役人の列んでゐる中で、天子様へ申し上げました。

『我が邦は開闢此の方、君臣の分が定まつてゐて、天津日嗣は必ず皇儲を立てなければならぬ、臣下の身として皇位を窺ふなどは、不屈き極まる。然様

な不心得者は、一日も早く除いてしまへと、八幡神はかやうに仰せられました』。

天子様は聞いて吃驚なさいました。役人一同も驚きました。道鏡は眞ツ赤になつて腹を立て、直様清麿の官や位を取上げ、名を穢麿と命じて、大隅國へ流しました。尚それでも腹が癒えず、途中で殺させやうとしましたが、雷雨に妨げられて、其の事を果さずに終りました。

道鏡は清麿を流したのみではなく、姉廣蟲も名を狹蟲と改めさせ、備後國へ流しました。

けれども、清麿のお蔭で萬世一系の皇位が完うされたのですから、忠義の道を知つた者は、皆な清麿を感心しました。中にも參議藤原百川は、絶えず衣食を清麿に送つて、不足なく暮させました。

稱德天皇は間もなく崩御になりました。次の天子様光仁天皇は、清麿の忠義であつたことを思召して、都へ召還され、反對に道鏡を下野國へお流しに

なりました。

清麿は其の後永く朝廷に仕へて、益々忠義を勵み、桓武天皇の延暦十八年（一千百十餘年前）に、六十七歳を以て薨じました。別格官幣社護王大明神は即ち清麿の靈を祀つたのであります。

坂上田村麻呂

――死して王城の鎮護となる

景行天皇の御代に日本武尊が御征伐になつて後も、蝦夷はしば〳〵叛いて朝廷に於ては、其の時々征伐の軍を出されましたが、桓武天皇の延暦七年になると、又々亂を爲して皇命に從はないのでした。

乃で其の翌年、天子様は紀古佐美を征東大將軍とし、五萬二千八百人の兵を以て、之を伐たせられましたが、古佐美は敗れて京都に歸り、次いで征東大使に任ぜられた大伴弟麻呂も、やはり負けてしまひました。

蝦夷の勢ひはかくて益々盛んになり、誰憚からず亂暴を働きましたので、

天子様は坂上田村麻呂に命じて、之を御伐たせになりました。田村麻呂は左京太夫苅田麻呂の子で、身の長は五尺八寸、眼は蒼隼の如く、髯は金線の如く、笑ふときには稚子も懷き、怒るときには猛獸も慴れるといふ風の人でした。延暦十二年（一千四百廿年程前）の五月に京都を發し、蝦夷を平げて、十月に凱旋しました。

其の後數年を經て、延暦二十年になると、蝦夷は又々叛きました。而も其の勢ひの盛んなことは。酋長の高丸、惡路王の二人を將として、數萬の兵手に〳〵獲物を携へ、奥羽から武藏、相摸を經て、早くも駿河の國清見ケ關まで進軍し、將に京都へ攻め上らうとするのでした。田村麻呂は今度も征夷大將軍に任ぜられて、蝦夷征伐にと出かけました。

高丸及び惡路王は、田村麻呂出陣と聞いて、一戰にも及ばず、奥羽へ逃げ退きました。田村麻呂は之を追うて奥羽に下り、激しく攻めてかゝりましたが、蝦夷の軍も仲々強くて、容易くは平定に至らないのでした。

田村麻呂はにが〳〵しく思つて、こゝに謀略を定め、五萬餘りの兵を三手に分け、たゞ一擊にといふ勢で攻め立てました。蝦夷の方でも、高丸、惡路王の兩人、馬を陣頭に立てゝ奮ひ戰ひ、屢々味方を苦しめました。

かくと見た田村麻呂は、弓に矢を番ひ、きり〳〵と引絞り、高丸めがけて切つて放ちました。高丸は胸を射貫かれ、馬からどつと落ちました。味方の兵は透さず其の首を打取りました。

惡路王は大に怒り、大きな鉾を打ち揮り〳〵、田村麻呂の控へた神樂ケ岡へ斬り込みました。田村麻呂は些とも騷がず、劒を拔いて渡り合ひ、さしも猛き惡路王を、馬上から切つて落しました。

こゝに於て、蝦夷の軍も木の葉の如く散つてしまひ、田村麻呂は首尾よく平定の功を成して、京都へ凱旋しましたが、翌延曆二十一年には、再び奥羽に下つて、膽澤の城を築きました。朝廷の御威光は、益々蝦夷の地に振ひました。

嵯峨天皇の弘仁二年に、田村麻呂は死にました。京都清水寺の背後にある將軍塚は、即ち其の墓であります。永く王城の鎭護とならしめるために、鎧兜を着けさせて、其のまゝ葬つたとか申します。

菅原道眞

配所に在りて君を偲ぶ

鎌足以來藤原氏の勢ひは、年と共に盛んになつて、上を凌ぐ振舞が屢々ありました。人皇第五十九代宇多天皇は、ひどく之を憎ませられて、其の專權を抑へるために、菅原道眞をお用ひになりました。

道眞は參議是善の子で、家は代々學者の家だから、學問の博かつたことはいふ迄もなく、政治の道にも通じてをりました。

宇多天皇は御年三十の時、道眞と御相談の上、御位を皇太子敦仁親王に譲りになりました。これが醍醐天皇であります。道眞は宇多天皇の仰せを受けて、醍醐天皇をお輔け申上げ、益々忠義を勵みました。だから天子樣も大

層道眞を御信任遊ばされて、昌泰二年（一千十餘年前）には、右大臣の役を授けられました。

道眞がこんなに重く用ひられることを、藤原氏の人達は、心惡く思ひました。さうして何とか道眞を除く方法はないかと、そればかりを考へました。だから三善清行は道眞の身の上を心配して、

『貴方が然うしてゐられては險呑だから、役を退かれたがよからう』

と勸めました。けれども道眞は、自分の身を思はずして、益々忠義を勵み、善き政治を施しました。上は天子樣、下は日本中の人民、皆道眞を喜びました。

道眞を喜ばなかつたのは、藤原氏の人々のみで、殊に左大臣藤原時平は、道眞が追つけ關白職を授けられるといふ噂を聞き、妬ましさの餘り、

『道眞は天子樣を退け奉つて、自分の女の適つてゐる、齋世親王を御位に登せやうと企んでをります』。

かやうに讒言をしました。

お年の若い天子樣は、時平の言を信ぜられて、俄かに道眞を太宰權帥に貶し、筑前の國へお流しになりました。道眞には長子高規を始め、二十三人の子がありましたが、天子樣はこれをも各所へお流しになりました。

其のとき宇多天皇は、醍醐天皇に會つて、道眞を助けやうとされましたが時平は御所の門を閉ぢて、宇多天皇を入れませんでした。

道眞は筑前へ流されてからも、天子樣の御恩を忘れかねて、

去年今夜侍清涼。
恩賜御衣猶在此。
秋思詩篇獨斷腸。
捧持日々拜餘香。

といふ詩を作りました。

道眞が筑前へ流されたのは、右大臣を授けられた翌年、即ち延喜元年でしたが、足掛け三年の後延喜三年に、五十九歳で死にました。然るに道眞の罪のないことは、追々明白になつて、醍醐天皇も今は御後悔遊ばされ、延長元

年（九百九十年程前）には道眞の官を元通りに復し、且つ正二位を送られました。

日本全國到る處に鎭坐ある天滿宮は、菅原道眞を祀つたのであります。

北條時宗（上）——勇斷元主の請を斥く

後宇多天皇の弘安四年に、元兵十萬我が九州に寄せて來たのを、鎌倉の執權北條時宗が討攘つて、國家を泰山の安きに置きました。世に弘安の役と申します。

今其の次第を申しますと、元の太祖成吉思汗は、蒙古から興つて、附近の國々を滅ぼし、遂には歐羅巴まで攻め込み、歸ると今度は支那の方へ領地をひろめました。かくて忽必烈の代になると、宋を滅ぼして國號を元と名づけ朝鮮を併せ、更に我が國を征服しやうといふ、大した非望を起しました。

乃で元主は、龜山天皇の文永五年（六百四十餘年前）二月に、高麗を使として、好を通ずるやうと言つて來ました。天子樣は鎌倉に命じて、何うしたものかと、其の相談をさせられました。恰度其の年に執權となつた北條時宗は元の書面に無禮な事の書いてあるのを怒り、返事もせずに、使を逐ひ返しました。

然うしておいて、軍備を整へてをりますと、其の後四年目の文永八年に、元使趙良弼といふ者が、筑前の今津へ來て、先年の返事を求めました。時宗は又もそれを逐ひ返しました。

龜山天皇は文永十一年に、位を後宇多天皇に御讓りなされました。此の年元の兵三萬餘り、四百五十艘の軍艦に乘つて、我が壹岐及び對馬を攻め、老若男女を鏖にし、怖ろしいほどの亂暴を働きました。守護代宗資國は此のとき戰死を遂げました。

龜山上皇は一方ならず御心配なされて、伊勢の大神宮石清水八幡宮に、身を以て國難に代らんことを御禱りになりました。

勝誇つた元兵は、轉じて筑前に來て、太宰府を犯しました。少貳景資、大友頼康などの將士は、筥崎に於て之を防ぎました。元兵は鐵砲を放つて我が軍を苦しめ、一個月ほど烈しく戰ひました。然るに或る夜暴風が吹き起つて數多の敵艦は漂ひ沈み、夜の間に遁げ去つてしまひました。

ところが元はまだ〳〵懲りず、其の翌建治元年には、杜世忠以下五人の使を寄越して、是非返事を得やうとしました。時宗はそれら五人を鎌倉の龍の口で斬りました。

其の後四年目の弘安二年になると、元將范文虎が來て、周福欒、忠陣光の二人を太宰府に遣はし、通好の事を求めました。時宗は太宰府に命じて、二人の使を斬らせました。

北條時宗（下）——膽斃の如く元兵を鏖にす

北條時宗は此の間に怠らず軍備を整へました。公私共儉約をして軍資金に

備へ、東國の兵を驅り催して太宰府其の他沿海の地を固め、播磨長門の邊をも警しめ、九州の海岸には石の疊を造り、以て元兵の來るのを待ちました。

弘安五年の五月、元兵十萬人、高麗兵一萬人、四千餘艘の軍艦に乘り、海を蔽うて寄せて來て、先づ壹岐對馬を取り更に博多に向ひました。其の太將は弘安二年に來た范文虎でありました。

我が九州、中國、四國の兵は、肥前、筑前の海岸に構へ、探題北條實政を大將として、之を禦ぎました。我が軍は何れもよく戰ひましたが、殊に一方の大將草野七郎は、夜二艘の船に乘つて敵艦に押寄せ、火を放けて、元兵を斬つたり虜にしたりしました。

かくて元兵は、何うしても陸へ上ることが出來ないので、軍艦を鐵の鎖でつなぎ合せ、高い櫓を立てゝ、其の上からどん〳〵大砲を放ちました。流石の我が軍も、これには大に苦みましたが、河野通有は膽力勇氣の人に優れた人でしたから、小舟を飛して敵艦に近づき、檣を梯に代へて敵艦に登り、刀

を揮つて數十人を斬殺した上に、其の艦將を生擒りました。安達次郎、大友貞親等も之につゞいて進み、大に敵兵を惱ましました。

かくて戰爭は六十日もつゞきましたが、敵は到頭上陸することが出來ず、退いて松浦の鷹島に據りました。范文虎は我が軍の驍勇無比なるに恐れて、先づ逃げて去つてしまひました。

する中に、閏七月一日になると、にはかに暴風が吹起つて、逆卷く濤に敵艦悉く壞れ沈み、大方皆な溺れ死んで、漸く生き殘つた千人ほどが、尙ほ鷹島に留まつて、軍艦のやぶれを修繕し、逃げて行かうとしました。ところへ少貳景資等が兵を率ゐて押渡り、片つぱしから斬り殺し、生擒三人だけを國に還らせました。

弘安の役は我が國の大勝利となりましたが、それといふもの、時宗の措置が宜しきに適つたからであります。其の後も時宗は一層軍備を修めました。元主忽必烈も再び攻めて來やうとしましたけれども、其の家來に諫められて

思ひ止まりました。

楠正成（上）——『今日の事一に卿の力なり』

楠正成は河內國の人であります。元弘元年後醍醐天皇が笠置へ落ちさせられたとき、正成はお召によつて罷り出て、

『臣が生きてをりまする間は、決して御心配には及びません』。

と申上げ、河內國へ歸ると直ぐ、兵を赤坂城に擧げて、北條高時の軍を待ち受けました。

六波羅の探題北條仲時は、高時の命を受けて笠置を攻め、笠置が陷ると、今度は赤坂城へ攻め寄せました。正成は善く戰ひましたけれども、敵の軍は十數萬、味方は僅に五百人、とても勝てるものではありません。正成は遂に赤坂城を棄て、更に城を金剛山に築いて、それへと立籠りました。

翌くれば元弘貳年の春三月、曩に北條氏の手に捕へられ給うた後醍醐天皇

は、隱岐國へ行幸になりました。

五月正成は赤坂城を取戻しました。

六月護良親王は兵を吉野に擧げ給ひ、播磨國の人赤松則村がお味方をしました。

元弘三年の四月、北條氏の大軍が攻め上つて、先づ吉野を陷れ、次に赤坂を破り、八十萬の兵すべて正成の金剛山へと集りました。さうして唯だ一打ちにと攻め立てましたが、正成は種々の奇らしい謀を以て之を防ぎ、城は容易に拔けませんでした。

此の有樣を見て、官軍にお味方する者が諸處に現はれました。赤松則村は播磨に、土居得能は伊豫に、それ〴〵兵を擧げました。新田義貞も護良親王の令旨を受けて、上野國で旗揚げをしました。

隱岐國に在らせられた後醍醐天皇は、此等の事をお聞きになつて、密かに伯耆國へと逃れ、名和長年にお寄りになりました。長年は船上山に城いて、

天子樣をお迎へしました。

年の五月七日に、足利尊氏は北條氏に叛いて京都の六波羅を陷れ、それより約そ半月の後ち、新田義貞は鎌倉を攻め落しました。かくて高時以下北條氏の人々二百八十人皆な自害をし、北條氏は全く亡びてしまひました。

金剛山の圍みはこゝに於て解け、八十萬の賊兵は自然に散つてしまひました。

天子樣は六波羅の落ちたことをお聞きになると、船上山を發て、攝津國兵庫迄お見えになりました。正成は鳳輦をお迎へし、天子樣にお目にかゝりました。天子樣は、

『今日かういふ目出たい事になつたのは、皆な卿のお蔭である』。

と、正成の功をお褒めになりました。

時に元弘三年の六月でありました。

楠正成(下)——『嗚呼忠臣楠子之墓』

建武二年足利尊氏は、鎌倉に據つて反きました。後醍醐天皇は新田義貞に吩咐けて之をお討たせになりましたが、義貞は却つて尊氏の爲に破られ、京都へ逃げ戻りました。

翌くれば延元元年、尊氏は大軍を率ゐて京都へ攻め上りました。正成は之を山城國宇治に防ぎました。けれども尊氏は大渡を破つて京都へ攻め込み、天子様は止むなく比叡山へ行幸になりました。

そこで正成は、義貞と力を協せて尊氏を攻めました。尊氏は一堪りもなく京都を逃げ出し、遠く九州へ走りました。天子様は再び京都へお還りになりました。其のとき正成は、

『尊氏が二度戰ふ力を失ふまで、跡を追駈けて擊ちませう』。

と申しましたけれど、義貞が聽かなかつた爲に、其のまゝ捨ておくことになりました。

九州に走つた尊氏は、間もなく彼の地で大軍を驅り集め、自分は海路を經て、弟直義は陸路から、京都を指して攻め上りました。新田義貞は、急ぎ此の事を天子様にお知らせし、自分は兵庫へ退いて、尊氏の軍を待ち受けました。

天子様は大變のお驚きで、早速正成を召し出し、謀をお訊ねになりました

正成は、

『今直に敵と戰つても、勝てる見込はありません。だから、天子様は一旦比叡山へ行幸になり、尊氏を京都へ入れておいて、其の上で臣と義貞と力を協せ、尊氏を挾み擊にいたしませう。すれば尊氏を破ることは難かしくありますまい』。

かやうに申上げました。けれども參議清忠などは、此の謀を用ひませんでした。

正成は今は是れまでと覺悟を定め、僅かに七百人の兵を率ゐて、兵庫へと向ひました。其の途中、子の正行を河内國櫻井驛へ呼んで、我が亡きあとの心得を言ひきかせたことは、誰でもよく知つてをります。

兵庫へ着くと、正成は陣を湊川に張り、直義の率ゐてゐる賊兵二十餘萬を相手に、縱横無盡に戰ひました。さうして今にも直義を獲やうとしましたが其のとき尊氏の兵が背ろから迫つて來ましたので、正成は更にそれを相手に戰ひました。

けれども敵は目に餘る大軍、味方は僅かに七百人、其の七百人は大方打たれて、殘るはたゞ七十人餘りとなり、正成も今はこれまでと、湊川のほとりの百姓家へ入つて、弟正季と互ひに耦刺へて死にました。一族の者十六人、家來の者五十人、これも一緒に死にました。

かくと聞かせられた天子樣は、大層悼ませられて、正三位左近衛中將を贈りになりました。

新田義貞——至誠能く潮水を退く

新田義貞は八幡太郎義家から十七代目の孫で、代々上野國新田郡の金山城にをりました。元弘年中北條高時が、長野の護良親王、赤坂の楠正成を攻めたとき、義貞は東軍の中に加はつてをりましたが、護良親王の今旨を受けると直ぐ、上野へ歸つて義兵を擧げました。それは元弘三年（五百七十餘年前）の五月でした。

かくと聞いた鎌倉の北條高時は、弟泰家を遣はして、義貞を攻めさせましたが。義貞はこれを邀へて、十一日には武藏野の小手指ケ原に、十二日は粂川に戰ひ、十五十六の兩日烈しく泰家を擊つて、鎌倉へ追ひかへし、十八日には愈々鎌倉總攻擊を始めました。

乃で義貞は、本陣を藤澤村に搆へ、極樂寺切通、化粧坂、小袋坂の三方から、鎌倉めがけて犇々と寄せました。ところが極樂寺方面は、一番道が嶮し

くて、其の上敵の强兵が守つてゐたので、仲々進むことが出來ません。する中に、此の手の大將大館宗氏は戰死を遂げ、軍勢も片瀨迄追ひ退けられました。

義貞は此の體を見て、自ら二萬人の兵を引連れ、稻村崎まで進みました。ところが敵は海岸に柵を設け、兵船を其の南に列べて、寄らば擊たんと待ち構へてをりました。流石の義貞も進み兼ねて、稍少しく困却しましたが、何か心づいた樣子で、馬からヒラリと飛び下りざま、岩の上に突起ち上り、海に向つて申しました。

『臣義貞、今や天皇の御爲に逆賊を討たんとす。願はくば海神よ、臣の忠誠をしろしめして、潮水を退け給へ』。

かく祈つて、佩びたる黃金造りの太刀を頭上に捧げ、ザンブと海中へ投げ入れました。

不思議なるかな、曉近きころ潮水遠く退いて、兵船も共々流れ去り、自然

進軍の道が開かれました。義貞は急に令を下して海中を押進み、由井ケ濱に火をかけて、敵の背後から攻め立てました。不意を喰つた北條方は、忽ち總崩れとなつて、高時以下北條一門の者は、腹搔き切つて死んでしまひ、多年暴威を振つた北條氏はこゝに亡びて、政權再び朝廷に歸ることゝなりました

後ち足利尊氏が叛くに及び、義貞は屢々小軍を以て尊氏の大軍を破り、湊川の戰には、楠正成と力を協せて、大に尊氏を苦しめました。けれども不幸敗軍となるや、皇太子及び尊良親王を奉じて越前に赴き、金崎城、杣山城などに據りて、屢々賊軍と戰ひました。さうして一時は兵勢も振ひましたが、延元二年七月藤島を攻めたとき、流矢に中つて死にました。其の時年は三十八でありました。

義貞の死んだとき、賊兵が其の死骸を檢べてみると、兜の中に錦の袋に納めた詔書が入つてゐたさうであります。義貞が始終朝廷を忘れなかつた志を見ることが出來ます。是より先、正成は湊川で戰死を遂げ、朝廷の力と賴ま

せられた忠臣は、たゞ義貞のみでありました。然るに其の義貞も戰死したので、朝廷の御威光は、愈々益々衰へました。義貞は正成と共に、當代第一の忠臣であつたのであります。

護良親王 附 村上義光

元弘元年秋の頃、後醍醐天皇が北條氏を亡ぼさうとなされた御謀は洩れて鎌倉の大軍は雲霞の如く京都に攻め上り、六波羅と力を合せて、天子様を捕へやうとしました。天子様は一旦笠置へとお落ちになり、後ち賊兵の爲に捕へられて、隱岐國へ行幸なさるゝことになりました。

天皇弟三の皇子護良親王は、智勇兼備のお方でしたが、これは奈良へ落ちてゆき、槃若寺へ入られました。すると間もなく、笠置を落した賊兵が寄せて來ましたから、親王は經函に隱れて危うき命を免れ、村上義光等と共に大和十津川に走り、又も賊兵に攻められて、吉野へお入りになりました。さうして翌る二年の五月、兵を吉野に擧げ、使を諸國に出して、忠義の士をお集めになりました。

と此の事を知つた賊の大將二階堂貞藤は、大兵を率ゐて吉野を圍み、唯だ一打ちと攻め立てました。忠義に凝つた吉野の兵は、こゝを先途と皆勇ましく戰ひました。大塔宮御自身も大薙刀を揮つて、敵の中へ斬つて入り、斬り立て薙ぎ立て、縱横無盡に戰はれました。

が、敵は大勢味方は小勢、迚も敵ふものではありません。宮も最早これ迄と思召して、藏王堂といふ堂の前へ一同を集め、最後の酒宴をお開きになりました。

ところへ駈けつけたのは村上彥四郎義光、身には數多の疵を負ひながら、宮の御前にひざまづいて、

『吉野が陷ちるのも、最早目の前でござります、恐れながら、臣が宮に代つて死にますから、宮は其の間に此處をお逃げ下さるやう、就ては御鎧御直垂

を頂きたう存じます』。

と申上げました。けれども宮は、

『卿一人を殘しておいて、何うして我のみ逃げられやう、我も討死の覺悟である』。

と仰せられました。

義光は大きに氣を焦つて、

『親王が今お討死遊ばしては、日本の國は暗でございます。一時も早くお逃げ下さるやう』。

といふより早く、宮の御鎧に手をかけて、紐を解かうとしました。

宮も成るほどと思召され、手早く御鎧御直垂をお脱ぎになつて、

『我が若し生きてゐたらば、卿の跡を吊つてやるぞ。死ねば後の世で逢ふぞよ』。

かう仰せられて、宮は吉野山をお逃げになりました。

義光は急ぎ宮の御鎧御直垂を身に纏ひ、高きやぐらに馳せ登つて、

『我こそは大塔宮であるぞ。汝等よく我が最期の有樣を見て置け』。

と大音聲に呼はつて、腹かき切つて死にました。

斯くと見た賊兵どもは、

『ソレ宮の御自害だ』。

我こそお首を頂かんものと、ドツとやぐらの周圍へ寄せました。

しかし眞の大塔宮は、此の騷ぎに紛れて吉野を逃れ出で、天の川から高野山の方へお出でになりました。

する中に、楠正成、新田義貞、名和長年などの忠臣が四方に起り、遂には北條氏を亡ぼしましたので、建武中興の大業此に成り、天子樣はめでたく京都へ還幸になり、護良親王は兵部卿に任ぜられました。ところが親王は、足利尊氏の異圖を看破いて、之を除かうとなされたが爲め、却つて鎌倉の土牢中に囚はれの身となり、建武二年の七月二十三日、尊氏の弟直義の手にかゝ

つて、果散なくなられました。御年は二十八でありました。

兒島高徳

櫻樹に題して志を九天に奏す

兒島高徳は備後國の人であります。元弘二年の春、後醍醐天皇には逆臣北條高時の爲に、隱岐國へ遷され給ふよしを耳にして、高徳は同じ志の人々を驅り集め、

『聖人の語に、身を殺して仁を成すとある。今は躊躇すべき時でない』。

と。舟坂山に待伏して、鳳輦を奪ひ奉らうとしました。

高徳等は鳳輦のお見えになるのを、今か今かと待ちました。けれども鳳輦は參りません。これは不思議と、人を遣つて探らせたところが、案外にも鳳輦は山陰道の方へ向はせられたのでした。

高徳等はではと一同其方へ出向いて、杉坂といふ處まで往きました。さうして其の地の百姓共に訊いてみると、

『鳳輦は最早疾くにお通過になりました』。

といふのでした。高徳初め、

『エゝ殘念な』。

と口惜しがりましたが、何とも致し方はありません。人々は失望して、四方へ散つてしまひました。

かくて跡には高徳のみが殘りました。高徳は一度天子様にお目にかゝつて心の中を申上げたいと、尙も鳳輦の後を追ひましたが、其の機を得ないので

した。乃で或る晩行在所のお庭へ忍び入り、櫻の樹を削つて、

天莫レ空二勾踐一　時非レ無二范蠡一

と書きつけました。

これは支那の事、越の國王勾踐といふ人は、吳の爲に打破られて、非常な辱しめを受けたけれども、范蠡といふ忠臣の佐けによつて、其の恥を雪ぐことが出來た。高徳は天子様を勾踐に譬へ、自分を范蠡に譬へて、今の世にも

忠義の士のあることを、お知らせ申上げたのであります。

翌朝になつて、警護の兵どもはそれを見ましたが、誰一人讀み得る者はなく、徒らにワイ〳〵騒ぐばかりでした。乃で天子様に申上げますと、天子様は凝とそれを御覽になつて、ひとり心にうなづきつゝ、お悅ばしさうに、微笑をさへ浮ばせられました。

楠正行——至誠純忠父の子なり

延元々年に父正成が攝津國湊川で討死したとき、正行は河內國にをりましたが、尊氏の送つて來た父の首を見て、餘りの悲しさに腹を切らうとし、母に止められて後は、日夜戰爭の稽古を勵み、やがて大人になると、吉野朝に任へて、父にも劣らぬ忠義を盡しました。

後村上天皇の正平二年に、正行は尊氏方の細川顯氏、山名時氏と、攝津國瓜生野で戰つて大捷利を得ました。尊氏は大に驚きましたが、これではならぬと、其の翌年正月早々、高師直を大將とし、兵八萬を率ゐて、正行を討たせました。

かくと聞いた正行は、弟正時及び一族の者を引連れて、吉野の皇居へ參つて、

『臣は平素父正成の志を繼いで、逆賊を滅ぼすことを心がけてをりますけれども、何分體が弱うございますので、疊の上で死ぬやうな事があつてはと、それぱかりが心配でございます。然るに今度賊の大兵が攻めて參りました。今こそ臣が命懸け戰ふべき時でございます。臣が師直の首を取るか、師直が臣の首を取るか、二つに一つの覺悟でございます。何卒今生のお暇乞ひに、一度天子様のお顏を拜したく、別けてお願ひ申上げます』。

かやうに申上げました。

すると天子様は御簾を揚げさせ、正行始め一族の者を御覽ぜられて、

『朕は汝父子の忠義を滿足に思ふ。今頼みに思ふ者も、汝等の外にはない。

だから假令戰爭に負けるやうなことがあつても、決して命を棄てないやうにせよ』。

と仰せられました。

正行は涙を流しながら御前を退り、それより後醍醐天皇の陵へ參拜をし、如意輪堂の扉に、

かへらじとかねて思へば梓弓、
なき數にいる名をぞ留むる。

といふ和歌を書きつけ、進んで四條畷に陣を張りました。

かくと見た賊の大將師直は、兵八萬人を五隊に分けて、先づ官軍の將隆資を破り、次には正行の後陣を破りました。正行は何のとばかり、三百騎を引きつれて突進み、一騎當千の勢ひ鋭く、手當り次第に斬立て薙立て突立て、直ちに師直の軍に迫り、其の首を獲んものと、勇ましく戰ひました。

其の戰の激しかつたこと、屍は山と積まれ、血は河と流れました。さうして師直も、今や危うく見えましたが、家來の某なる者、

「我こそは高師直なるぞ』。

と呼はつて、討死をしました。正行は其の首を獲て、大に喜びましたが、贋首と知つて、復も師直に迫りました。

けれども時は既に遲く、兵は死し馬は斃れて、殘るは僅かに五十人餘り、正行も疲れ切つて、今は思ふやうにも戰へません。賊の射る矢が雨のやうに來る中で、弟の正時と刺しちがへて、華々しい討死を遂げました。其の時年は二十二でありました。

毛利元就

——御即位の料を献ず

天文二十年の秋八月、周防國山口の城主大内義隆は、其の臣陶晴賢に攻められて、

討つ人も討たるゝ人も諸共に、

如露又如電應作如是觀。

といふ和歌を詠み、自害して果てました。

其の時義隆は、毛利元就へ書面を送つて、何卒我が仇を討つて呉れと、呉も申入れました。元就の領分は安藝國半分だけで、まだ〳〵小さい身分だつたのですが、此の書面を見ると、涙を流して義隆の死を悲しみ、復讐の心を定めました。

四五年は夢の間に過ぎて、やがて弘治元年となると、元就は陶晴賢を撃つことを朝廷へお願に及び、其の勅許を受けて、茲に戰の準備を整へ、謀を運らして晴賢を嚴島へ誘ひ寄せ、たゞ一撃ちに撃ち取りました。元就の義利堅いこと、智あり勇ある大將であることは、忽ち天下に聞え渡りました。

其のころは世にいふ戰國時代で、諸國の大名互ひに攻め合ひ伐ち合ひして自分の領地を擴めることばかりに骨を折り、大義名分なぞは少しも念はず、上に天子様の在らせられることをさへ、殆んど忘れてゐたのでした。

然るに毛利元就が逆臣陶晴賢を討つのに、朝廷の勅許を仰いだなごは、當時に於ては希らしいことで、感心な心がけといはなければなりません。

時の天子様は後奈良天皇でしたが、弘治三年に崩御になると、今度は正親町天皇が御位にお即きなされました。ところが誰一人朝廷の事を御心配申上げる者のない、亂れに亂れた世の中のことゝて、朝廷はひどく衰へさせられ御即位を行ひ給ふ御費用にも差支へる有さま、かくて空しく三四年をお過しになりました。

此のよしを承はつた毛利元就は、恐れ多いことに思つて、其の御費用を献上しました。かくて正親町天皇が御位に即かせられてから、足掛け四年目の永祿三年に、始めて御即位の式が行はれました。天子様も大層の御滿足で、元就に大膳太夫の官を授け、菊桐の御紋及び屋形號を賜はりました。

元就は元龜二年に、年七十五を以て死にました。天子様は大層之を惜ませられ、正三位をお贈りになりました。

織田信長——皇居を造營し奉る

永祿二年、桶峽間の一戰に今川義元を破つてから、織田信長の名はにはかに揚り、正親町天皇のお耳にも聞えて、京都へ出て天下を定めよといふ密勅が下りました。

信長は謹んで勅命を承はり、京都へ出る準備として、先づ美濃國の齋藤龍興を滅ぼし、岐阜を根據地と定め、さうして好き機を窺つてをりました。

するとそこへ、前の將軍足利義輝の弟の義昭が賴つて來て、仇松永久秀を滅し、足利家を再興することを託みました。信長は、

『畏まりました』。

と引受けて、岐阜を出て先づ近江國を平げ、進んで京都へ入りました。それは永祿十一年のことでした。

乃で信長は先づ義昭を將軍とし、次には京都近くの國々を平げると同時に

皇居を修めることに骨折りました。

其の頃は戰國時代の末で、朝廷の御威光も雲に蔽はれた日のやうに光を失ひ、皇居は頽れに頽れ破れに破れて、塀や壁のくづれ落ちた間から、子供が大勢お庭の中へ入り込み、紫宸殿の階の直ぐ下で、鬼ごつ子をしたり、土人形を作つたりして遊ぶほどでした。

夜、三條大橋の上に立つて北の方を眺めると、皇居の中の火がチラ〳〵見えたとのこと、頽破のひどかつた事が解ります。

從つて朝廷に仕へてゐたお公家さんの困り方も大したもので、或る人が常磐井公にお目にかゝつたとき、公は着る衣服がなくて、蚊帳を體にかけて會はれたさうでありますす。

信長は京都へ入つた翌年に二條城を修め、つゞいて皇居を造ることに取かかり、三年目の元龜二年に其の工を竣へました。今迄見る影もなかつた御所は、見違へるほど立派なものとなりました。

其の他お勝手の御費用を献上に及び、費用の足りないが爲に廢れてゐた儀式を復し、久しく缺けたまゝになつてゐた官職を興しなどしました。朝廷内外のことは、かくて漸く整つたのでした。

天正元年將軍義昭は、信長の勢を妬んで、之を除かうとしました。信長は大に怒り、たゞ一擊に擊ち破つて、義昭を河内國へ逐ひました。尊氏から此のとき迄、十五代二百三十八年、足利氏は遂に亡びてしまひました。

信長は引つゞき西を攻め東を伐ち、天正十年には早くも二十餘個國を平げ天下を一つに統べるのも、最早遠からずと見えましたが、不幸にも此の年逆臣明智光秀に弑せられて、其の大業を仕遂げずに、本能寺の烟となつてしまひました。

今から三百三十餘年前の事であります。

豐臣秀吉（上）——光秀を誅して亡主の仇を復す

織田信長には、丹羽長秀、柴田勝家、瀧川一益などいふ強い家來が、澤山ありましたが、殊に豐臣秀吉は智慧と勇氣の一番優れた大將で、信長が逆臣光秀に殺されたときには、最も早く駈けつけて光秀を誅し、遂には信長の志を繼いで天下を平定しました。其の上朝鮮までも征伐し、一度は明國をさへ屈服させたのですから、秀吉ほどの大英雄は、三千年の日本歷史上、餘り澤山はないのであります。

斯やうな大英雄の秀吉も、其の素性を調べてみると、卑しい水呑百姓の子だつたのであります。今から三百七十年ほど前、尾張の愛知郡中村に、木下彌右衛門といふ農夫がありました。不幸にも二人の子を殘して死にましたので、妻は其の子を連れて、同じ中村の竹阿彌といふ者の家へ嫁きました。二人の子の中、長男が即ち秀吉であります。源平藤橘といつて、昔から此の四

家を貴い家筋としてあります。さうして英雄豪傑は大概皆な此の四家の後裔でありますが、秀吉のみは然うでありません、四家の外から起つたのであります。

秀吉が初めて信長に仕へたのは、其の年十七の時でした。ところが、智慧も勇氣も人並以上に勝れてをりましたから、忽ちの間に出世をして、十二三年の後には、江州長濱城主となり、祿高二十二萬石の立派な大名となりました。

光秀が京都の本能寺を襲つて、信長を弑した時には、秀吉は山陽道の毛利氏を滅ぼさうとして、備中高松の城を圍んでをりました。そこへ本能寺の變の報があつたものですから、早速毛利氏と和睦をして、京都を指して引返しました。

信長を弑した光秀は、最早天下は自分のものと、大威張りに威張つてをりましたが、秀吉が上つて來るのを聞いて、早速戰爭の用意をし、秀吉を山崎に邀へ擊たうとしました。それには先づ天王山を取り、秀吉が山崎へ來るのを待つて、高い處から攻め下すことに軍略を定め、急ぎ天王山へと向ひました。

ところが、秀吉は軍を進めることの極速い人でしたから、光秀よりも先に天王山を取りました。光秀は驚きました。加に兵の數もズツと多く、三萬六七千人もをりましたから、戰はない前から、これは負けたと、勇氣を失つてしまひました。かくと見た山の上の秀吉は、ドツと光秀を攻めました。光秀は一堪りもなく、打破られて、勝龍寺といふ寺へ逃げ込み、更に伏見へ逃げて行かうとして、夜小栗栖を通りかゝりますと、其の地の農夫の作右衛門といふ者が、籬の蔭に隱れてゐて、竹槍で突いて蒐りました。光秀はそれを防ぐ暇もなく、肋を突き通されて、馬から轉がり落ちたが最期、其のまゝ息も絶えました。乃で秀吉は光秀の首を梟しました。

光秀も仲々強い大將でした。それでありながら、又たツイ今の先まで天下

を取つた氣でをりながら、卑しい農夫の竹槍にかゝつてあへなく死したのは主人を弑した不忠の罰と謂つて宜しい。それに引換へ秀吉は、主人のために忠義の戰をしたのですから、容易く光秀を滅ぼすことが出來たのでありませう。

それからといふもの、秀吉の勢の目覺しさは、旭の昇る有樣でした。先づ柴田勝家、丹羽長秀、瀧川一益の三人と、尾張の淸州に相談會を開き、其の結果信長の孫の三法師を立てゝ織田家の主人としました。それから信長の葬式を濟すと間もなく、柴田勝家や瀧川一益などが、秀吉を滅ぼさうとしましたから、秀吉は大に怒つて、反對にそれ等を滅ぼしてしまひ、大阪に城を築いて、其處に住むことゝしました。

其の時の天子樣正親町天皇は、秀吉に關白太政大臣の役を授け、豐臣の姓を賜はりました。秀吉はそれまで羽柴といふ姓でゐたのであります。

豐臣秀吉（下）——聚樂第に御臨幸を仰ぐ

かくて日本の中央部は、大方秀吉の手に屬きましたが、遠國へ行くと、まだ〳〵秀吉に從はない大名が、澤山ありました。東には相模に北條氏康がをり、陸奥に伊達政宗がをりました。西には薩摩に島津義久がをりました。北には越後に上杉景勝（謙信の子）がをりました。秀吉は此等の大名を擊ち從へなければならないのでした。

乃で秀吉は、第一番に島津義久を伐つて降參させ、九州を平げました。すると間もなく、上杉景勝が京都へ出て來て、秀吉に從ふ約束をしました。日本六十餘州、九分通り迄秀吉の手に屬いたのであります。

秀吉は先づと安心して、京都の內野といふ處に、立派な第宅を造り、それを聚樂第と名づけました。秀吉は昔し後小松天皇が、足利義滿の第へ行幸になつたことを想ひ出して、後陽成天皇と前の天子樣太上天皇（即ち正親町天

皇のこと）とを、聚樂第へお招き申上げました。それは天正十六年四月のことであります。

天子様は秀吉のお願を御聽許になつて、聚樂第へ行幸になりました。秀吉は家門の面目此の上なしと喜んで、大名六十人餘りを引率れてお迎へしました。天子様の鳳輿が二つ、各親王殿下や大勢の公卿を從へて、出御になると、それらの大名が前後を警しめてお供をする、其の御行列の見事なことは、宛然錦繪を見るやうでした。京都の人はいふまでもなく、十里も二十里も先から態々出て來た人もあつて、皆な道傍に坐つて御行列を拜觀みました。中には餘りの有がたさに涙を流し、

『足利氏の末以來、世の中が亂れに亂れて、朝廷もひどく御衰微になつたことですから、こんな立派な御行列が拜觀めやうとは、今日迄夢にも想ひませんでした。これも天下泰平の象です。今夜からは安心して寢られます』。

といふ者もありました。

聚樂第へ着御になると、先づ御酒が出て、天子様は秀吉に天盃を賜はりました。夜は管絃のお催しがあつて、其の番組は、一番五常樂、二番郢曲、三番太平樂、何れもめでたい音樂でした。翌日になると、秀吉は天子様の御前に於て、ごこ〳〵迄も朝廷を尊び奉ること、關白の命令には決して背かぬこと。此の二つを約束させました。其の後もいろ〳〵のお催し事があつて、天子様と太上天皇とは、五日目に御所へ還御になりました。

其の時秀吉は、黃金百兩、金襴二十卷、衣服百領、絹百匹、金の建蓋金臺各々二個（此の二品は銀の盆に載せて）を献上げ、尙ほ他にも、麝香だの、馬だの、繪だの、何れも立派なものばかり、澤山に献上げました。次には京都から上る租稅殘らずを、皇居の御料に充てることゝし、各親王殿下にも献上物をし、公卿の人たちにも、それ〴〵金や品物を贈りました。

それから又た諸大名にも、黃金三萬枚、銀五千枚、外に三十六萬五千兩の金を分け與へました。其のころ黃金は、一種の奇らしい寶になつてをりまし

たから、役人に名を呼ばれて、一人々々秀吉の前へ出て頂戴するとき、大名たちは幾度も〳〵頭を下げ、ホク〳〵して喜んださうであります。

秀吉は其の後、小田原を圍んで北條氏を滅ぼし、戰はずして伊達氏を降參させ、日本六十餘州を掌の中に握つて、次には朝鮮から明國にまで手を延しました。賤しい水呑百姓から身を起して、それほどの大事業を成した人は、秀吉の外にはありません。秀吉は實に英雄中の英雄、豪傑中の豪傑だつたのであります。

從つて秀吉のした行の中には、吾等の學ぶべき事が少からずありますが、最も尊く思はれる一事は、朝廷に對し又た主人信長に對して、忠義の道を忘れなかつたことであります。吾等は何を措いても此の點を學ばなければなりません。

徳川光圀

――尊王論者の魁となる

寶曆八年、越後國の人竹内式部は、お公家さん達に向つて、尊王の大義を論じ、政權を朝廷へ取戻さなければならぬことを唱へた爲に、幕府から追放の科を受けました。これを第一として、山縣大貳、藤井右門、高山彦九郎、蒲生君平、其の他漢學者の中にも、國學者の中にも、或は大名や侍の中にも尊王論者が續々出て來て、遂には幕府を倒して、王政復古明治維新の大事業を成し遂げたのですが、而も其の本を調べてみると、是よりもズツと先に、尊王論の魁となつた人があつたのであります。誰かといへば水戸の藩主徳川光圀であります。

徳川光圀は頼房の子で、家康には孫に當ります。學問が好きで、殊に大義名分といふ事を心がけ、之を明かにすることにつとめました。其の一つ二つを擧げてみると、

林春齋の著はした本朝通鑑といふ書物の中に、日本人の先祖は支那から來たもので、吳の太白の裔であると、こんなことが書いてあるのを見て、大に腹を立て、幕府に申上げて、書き直させてしまひました。

我が國の正保元年に、支那は明が亡びて淸の世となり、明の遺臣で我が國へ逃れて來た者が澤山ありました。萬治二年に歸化して來た朱舜水は、大層な學者でしたが、光圀は此の人を迎へて師匠としました。

さうして寛文十二年には、彰考館を開いて學問を奬めました。

光圀は平生楠正成を尊んでをりましたが、正成の討死した處を搜し出して元祿五年に「嗚呼忠臣楠子之墓」と題した石碑を建てました。

光圀は我が國の國體を明かにする爲に、大日本史を著はしました。これを著はすについては、天下の學者を集めて古い記錄などを調べさせ、何か疑はしいことがあれば、一々儒者たちと議論をして、正しい歷史を作ることにつとめました。例へば吉野朝を正統と定めたなどは、其の著るしい一つであり

ます。かくて大日本史は元祿十年に出來上りましたが、人々は之に依つて始めて我が國の國體を知り、朝廷の尊ばなければならぬことを知りました。

光圀が斯やうに朝廷を尊び奉つた事は、後年起つた尊王論の本であります。だから明治維新の大業も、光圀の力に依る點が多いものと見て宜しい。

光圀は大日本史が出來上つてから四年目の元祿十三年に、年七十二を以て薨じました。

松平定信

恭謙以て禮を盡す

松平定信は德川三卿の一なる田安中納言宗武の子で、八代將軍吉宗の孫であります。白河城主松平定邦に養はれ、十代將軍家治が薨じて、家齊が十一代將軍となつたとき、定信は幕府へ入つて老中となりました。時に天明七年其の年三十歲でありました。

爾後七年の間、定信は將軍家齊を助けて善き政治を施しましたが、此の人

に於て殊に感心なことは、朝廷を尊ぶ心が篤く、少時も忠義の道を忘れなかつたことであります。

定信が老中となつた翌年、即ち天明八年の正月に、京都に大火事があつて恐れ多くも皇居が燒けてしまひました。定信は將軍の命を受けて、急ぎ京都へ上つて、御燒跡を調べました。

定信が御燒跡を調べてゐたとき、案内の者は定信の疲れたのを見て、何處からか床几を取寄せ、さうして休息を勸めました。定信は、

『それには及ばぬ』。

とばかり、其の勸めに從ひませんでした。理由知らぬ案内の者が、二度も三度も勸めますと、定信は言を正して、

『縱ひ御燒跡とはいへ、御坐所近くで休むなどは、恐れ多いことである』。

といつて、案内の者をたしなめました。

御燒跡の調べが濟むと、定信は江戸へ歸つて、假皇居の御有樣を將軍に述べ、

『一日も早く皇居をお造り申上げて、宸襟を安んじ奉らねばなりませぬ』。

といひました。將軍は定信に皇居御造營の任を吩咐けました。

定信は平素皇居の規模が狹く又小さく、其の上昔の式に違つてゐるを、殘念に思つてをりました。だから今回此の任を承はつたを幸ひに、高辻、五條などのお公家さん、林、柴野などの學者を撰んで、古い記錄をしらべ、それを本として皇居を造り、材木なども費用を構はず良い材木を用ひました。

又た土佐、住吉兩家の畫工に命じて、紫宸殿に用ひられる襖の賢聖障子を畫かせなどしましたから、三年目の寛政二年に出來上つた新皇居の立派さは前とは比べられないほどでした。

時の帝光格天皇は、大層御滿足に思召され、定信には太刀一口と三十六歌仙の色紙、將軍家齊には宸翰と御製の詩とを賜はりました。其のとき家齊は涙を流して、

『かやうな天恩を蒙つたのは、偏に卿の力である』。

といひ、自分で御製の詩を寫して、之を定信に與へました。

當時は幕府の勢ひの盛な頃で、役人の中には、徳川將軍の威光を笠に着て朝廷に對して傲りがましい振舞をする者さへありました。定信が徳川氏の一門でありながら、朝廷を尊び奉つたことは、まことに感心の至りであります。

頼山陽

勤王論の基を立つ

「日本外史」を著した頼山陽は、忠孝兩全の人でした。

頼山陽は安藝の人で、名は襄、通稱を久太郎といひました。大層な學者でしたから、京都の三本木といふ處に住んで、多くの弟子を敎へてをりましたが、其の評判は大したもの、山陽先生といへば、日本中誰知らぬ者のないほどでした。

一日の事、山陽が弟子共に「莊子」といふ書物を敎へてをりますと、故郷からの使が慌たゞしくやつて來て、

『春水先生が重い病氣にかゝられて、お命も危いほどですから、早速お歸り下さるやう』。

と申しました。春水先生といふのは山陽の父で、やはり大層な學者だつたのです。

それを聞くと、山陽の驚きは一通りでありません。見る〳〵顏色を變へ、手に持つた莊子を投げ出すと直ぐ、三本木の家を跡に、夜を日についで、安藝の國へ急ぎました。

二三日して漸く我が家へ辿り着き、

『唯今歸りました』。

とばかり、父を見やうとしましたが、殘念にも父は最早此の世の人ではなくお葬式さへ濟んだ後でした。

頼山陽は一方ならず殘念がり、涙を流して嘆き悲みました。さうして其の後は、死ぬまで、二度と莊子を弟子共に敎へなかつたとの事であります。

父を失くした山陽は、今はたゞ一人の母を京都に迎へて、孝行を盡しました。山陽は自分の像を畫かせて、それに、

此の脚母の輿に侍して、二たび芳山を躋り、三たび大湖に棹し、四たび淀灣を下る。

と書いてをりますが、母の心を慰めやうとして、芳野山や琵琶湖へ度々母を伴れて遊んだ。其の事を書いたのであります。

古語に「忠臣は孝子の門に出づ」と申します。親に孝行であつた頼山陽は君に對しても忠義でした。當時はまだ幕府の勢の盛なころで、多くの人は、幕府あるを知りて朝廷あるを知らぬといふ有樣でした。それといふのは、日本の國體を知らなかつたからで、日本の國體を知らなかつたのは、日本の歷史に暗かつたからであります。日本の歷史を調べれば、日本の國體即ち日本

は萬世一系の天皇がお治めなさるべき國であるといふことが、直ちに解るのであります。乃で山陽は日本の歷史を著はし、當時の人に日本の國體を知らせました。其の書物は二種あつて、一つは「日本外史」今一つは「日本政記」であります。

德川氏の末、勤王論が盛になつて、遂には幕府を倒しましたが、其の勤王論の本となつた一つは、頼山陽の「日本外史」及び「日本政記」であつたのであります。

天保三年六月十二日、山陽は突然血を吐きました。醫者に診せると、

『これは多年勉强の結果、肺病に罹つたので、之を癒す道はありません。

といふのでした。折しも「日本政記」を書きつゝあつた山陽は、何うか死ぬ前に書き上げたいと思つて、一層勉强しました。それがために病氣は日に增し重くなつて、其の年の九月二十三日、「日本政記」の筆を擱き、眼鏡を脫さずに横になると直ぐ、息が絶えてしまひました。それと氣がついて、家の人

が走り寄り、體を撫でゝ見ると、最早や冷くなつてをりました。年は五十二でありました。

高山彦九郎——三條橋上皇居を拜す

高山彦九郎は上野國新田郡細谷村の人であります。年十三のとき始めて太平記を讀み、逆臣足利尊氏の爲に、建武中興の業も一時の夢、のみならず、楠正成、新田義貞などの忠臣が、哀れな最期を遂げたことを知ると、彦九郎は殘念で堪りません。

『我は正成公義貞公の志を繼いで、朝廷の爲に盡さなければならぬ』。

と、早くも尊王の志を定めました。

彦九郎は十九の時に京都へ出て、或る先生に就いて學問すること二年、それを終ると、偏ねく日本中を遍歷し、同じ志の人を索ねては、尊王の心を語り合ひました。

又た露西亞人が我が蝦夷（今の北海道）を窺ふのを憤つて、一人切り彼の地へ渡り、實際の樣子を探りました。それが爲には、死ぬ位ゐの難儀な目に逢つたと申します。

彦九郎は度々京都へ往きましたが、其の時には、先づ三條大橋の上に坐つて、北の方遙かに皇居を伏し拜み、

『草莽の臣高山彦九郎、只今參上いたしました』。

かやうに申上げるのが常でした。之を見た人は、驚いたり、呆れたり、笑つたりしましたが、彦九郎は平氣なもので、少しも其の事を改めませんでした。

彦九郎或るとき郊外散歩に出て、偶然足利尊氏の墓を過ぎました。彦九郎は其の墓を屹とにらまへて、

『汝れ尊氏、皇子を殺したり、忠臣を殺したり、剩へ天子樣を虐げ奉つた汝の振舞は、憎みても尙ほ餘りありだ。我は今、天に代つて汝に刑罰を加へて

吳れるぞ』。

と罵りながら、鞭を揚げて、ピシヤリ〳〵と擲りました。

彦九郎は後年九州に渡つて、筑後國久留米の森嘉膳方に足を留め、泊つてをりましたが、寛政五年の一日、腹を切つて死んでしまひました。森の處には、主人嘉膳が彦九郎の言行を、書きのこしたものなどが、有るさうであります。

明治になつてから、朝廷は彦九郎の尊王の心に篤かつたことを思召されて特に從四位を贈られました。

蒲生君平——怒つて奸賊の像を鞭つ

蒲生君平は下野國宇都宮の人であります。豐臣秀吉に從つて勇名を揚げた蒲生氏鄉の裔で、更に昔に遡ると、藤原秀鄉が其の先祖だと申します。

君平は常に朝廷の御威光の衰へてゐるのを嘆き、又た露西亞其の他外國の

船が、しば〳〵近くの海へ現はれることを心配して、熱心に尊王攘夷の說を唱へ、之を唱へるときには、慷慨の餘り涙を流すほどでした。

或るとき酒宴の席で、

『楠公が湊川で死んだのは、些と早まり過ぎである』。

一人が斯ういふと、他の人々も口を揃へて賛成しました。折柄厠に入つてゐた君平は、之を聞くと堪りません。厠の團扇を持つたまゝ席へ戻り、團扇を揮り〳〵反對の議論を唱へました。

居合せた女中は、其の團扇を見て驚きました。汚い物が一面についてゐたのを、此等の問題に熱心な君平は、もう〳〵夢中で、少しも氣がつかないでゐたのであります。

君平が京都へ往つたとき、一日東寺を過ぎると、束帶姿の儼しい木像がありました。それは足利尊氏の木像でした。それを見た君平は、腹が立つて堪りません。尊氏の罪を數へ立て、鞭を執つて、打つて〳〵打ち据えました。

君平は常々御代々の天子様の山陵が、ひどく荒れ果てゝゐるのを、殘念に想つてをりました。乃で山陵を一々拜んで歩き、其の結果山陵志といふ書物を著はしました。山陵志は君平が命がけになつて、血と涙とを以て著はした書物で、世間の人が山陵の尊ぶべきことを知るやうになつたのは、此の書物の力と謂つても宜しい。

君平が朝廷の事國の事を喧しくいふのを、幕府は何か惡いことのやうに思つて、君平を叱りつけた上に、重い罪に陷さうとしました。君平は口惜しく思ひましたが、それから後は口を噤んで何事をもいはず、文化十一年の七月五日、年四十六で死にました。

僧月照——忠魂永く波間に入る

月照は元と玉井宗江といふ醫者の子で、名を久丸といひましたが、十五の年に京都清水寺の内成就院へ入つて僧侶となり、天保六年其の年二十四の時

には、師の僧に代つて成就院の住持となりました。

月照はお公家さんの近衛公と親しく交り、公から和歌を學んで、深く斯の道に通じてをりましたが、尙ほ尊王の心が厚く、其の結果年四十四のときに住持の職を弟の信海に讓り、自分は寺を出て、專ばら國の事に奔走し、尊王の說を唱へて、幕府に反對しました。

其の頃幕府は、井伊直弼が大老をつとめてをりましたが、尊王論者を憎むこと甚だしく、安政五年、鵜飼吉左衛門、吉田寅次郎、梅田源次郎、賴三樹三郎、橋本左内などを捕へ、尋で之を殺しました。

乃で月照の身も危險になりました。近衛公はこれを心配して、西鄕隆盛と一緒に京都を逃げさせました。月照隆盛の二人は、伏見から大阪へ遁れ、長州の赤間ケ關へ往き、更に九州へ渡つて、福岡の尊王家平野國臣及び西鄕の連れてゐた僕と都合四人、薩摩の或る港から船に乘つて、日向國へ逃げやうとしました。

其の間幕府の役人は、絶えず月照等の跡をつけ狙つて、何とかして捕へやうとしました。月照は隆盛に向つて申しました。

『幕府に捕へられて死ぬのは、如何にも残念でたまりません。何卒貴方の刀で殺して下さい。親友の手にかゝつて死ねば、それこそ私の本望です』。

隆盛は月照の親友でした。而も其の身の危さは、月照と同じことでした。二人は涙を流して口惜しがり、一緒に死ぬ相談を定めました。月照は筆を執つて、二首の和歌を書きました。

大君の爲には何か惜からん、
薩摩の瀬戸に身は沈むとも。

曇りなき心の月の薩摩がた、
沖の波間に今ぞ入りぬる。

其の夜は月の綺麗な夜でした。月照と隆盛とは舳に立つて、邊りの景色を賞めてをりましたが、やがて二人は抱き合つて、ザンブとばかり海中へ飛び

込みました。

平野國臣と隆盛の僕とは、急ぎ二人を引揚げました。さうしていろ〳〵介抱しますと、隆盛だけは息を吹き返しましたが、月照は其のまゝ死んでしまひました。

時に安政五年の十一月十一日、月照の年は四十六歳、薩摩國の東林禪寺といふ寺へ葬りました。

佐久間象山——國家の爲に一命を惜まず

嘉永安政の頃、外國の船が屢々長崎、下田、或は北海道の函館などへ來て交易を始めるやうにと、頻りに幕府へ迫りました。其のころの日本は、一切外國と交際ないことになつてをりましたから、幕府は外國人の請を斥けやうとしましたけれども、外國人は執拗く迫り、若し肯かなければ、戰爭を押始めやうといふ、怖しい勢を見せましたので、幕府の腰も追々摧け、外國人の

いふことを、聽容れさうになりました。

すると民間では、攘夷論の聲が喧しくなつて來ました。攘夷論といふのは外國人と交易するのは宜しくない、外國の船が來たらば、片ッ端から打攘つてしまふが可いと、然ういふ議論であります。

ところが、かやうな攘夷論を唱へた人も、外國人を懼れて交易を始めやうとした幕府も、外國の事は何も知らないでゐたのであります。當時の人が外國に就いて有つてゐた智識は、今日の小學校生徒よりも、尙ほ憐れなものでした。それでゐて、唯だ無暗に騷ぎ無暗に心配したので、今から考へると、隨分馬鹿げ切つた話ですが、當時の人は其の馬鹿げてゐることをさへ知らなかつたのであります。

然るに今お話しやうと思ふ佐久間象山は、早くも此の點に氣がついて、『戰爭に於て一ばん大切なことは、敵の力を知ることである。吾等は先づ外國の事を知らなければならぬ。多くの人は、支那の書物のみを讀んで、他に

學問のあることを知らない。間違つた話である。宜しく大に外國の書物を讀み、大に外國の事を知るべしである』。

かういつて、一生懸命に外國の書物を研究し、鐵砲の事、兵隊の事、城や軍艦の造り方まで、いろ〳〵と調べました。其の結果、象山は一つの鐵砲を造りましたが、それは外國の鐵砲にも優つた、實に立派なものでした。

當時象山が一ばん善く外國の事を知つてをりました。だから薩摩長州土佐肥前などの各藩は、使を象山の許へ寄越して、外國の事を尋ねました。象山は忠君愛國の心に富んだ人でしたから、それに對して親切に敎へたのみではなく、自ら進んで「荷蘭語彙」、「砲卦」などいふ書物を著はし、當時に外國の事を敎へやうとしましたが、幕府は其の書物を發行することを差止めました。

又た或るとき品川灣の砲臺を見て、『斯んな玩具のやうなものを造つて、外國と戰爭をしやうと思ふのか』。

と大笑ひをし、後ち幕府へ書面を出して、海防の策を述べました。けれども幕府はそれを用ひませんでした。象山は定めて殘念に思つたでありませう。すべて其の時代よりも進んだ議論は、容易に用ひられないものであります。幕府は啻に象山の議論を用ひなかつたのみならず、象山を捕へて二度迄も牢屋へ入れました。

する中に、外交問題が益々喧しくなつて來て、外國の事を知らなければならぬといふ考へが、朝廷にも幕府にも、各藩の間にも、追々盛になつて來ました。すると長州土佐の二藩からも、京都の飛鳥井大納言からも、幕府からも、頻りに象山を招きました。乃で象山は元治元年の三月に、始めて京都へ上りました。

其のころは攘夷論の最も盛な時でした。外國の事を善く知つてゐた象山は今日の場合外國人を擊ち攘ふなどは間違つた意見である。外國と交易を始める外はないといふ考へ即ち開國論を抱き、公卿や大名の間を奔走して、大に

其の事を論じました。すると薩摩藩主島津侯は、象山の身を心配して、

『今日の人は多くは攘夷論者である。然るに足下は開國論を唱へる。必らず人の憎惡を受けて、禍害を招くであらう。一日も早く京都を立退くか、或は開國論を慎しむか、兎に角要心が第一である』。

といひました。象山は涙を揮つて申しました。

『私は外國の事を研究し始めてから、二十年來此の開國論を抱いてをります若しこれを天下に公言することが出來るならば、命を捨てゝも惜しくはありません』。

象山は國のためには一命を捨てゝも厭はぬ考へでゐたのであります。

果せるかな象山は、國の爲に一命を捨てました。元治元年七月十一日、山階親王のお邸へ開國論を述べに上る途中、京都の木屋町に於て、攘夷論者のために刺し殺されてしまひました。其のとき年は五十四でありました。

吉田松陰——小塚原頭哀情多し

嘉永安政より後、佐久間象山の名を聞いて、教を受けに來る者が、澤山ありましたが、吉田松陰も其の一人でした。象山は松陰に向つて、

『日本勇兒たる者は、此の際外國に押渡つて、大に彼の國の形勢をしらべ、然る後之に對する策を考ふべきである』。

と聞かせました。松陰は長門の藩士で、忠君愛國の念に富んだ人でしたから象山の言に感激して、海外渡航の志を起しました。

乃で松陰は、早速長崎へ出かけて往つて、露西亞の軍艦に乘込まうとしましたが、往つて見ると、最早や露艦の立去つた跡でした。松陰は殘念に思ひながら、又の機を待つことゝしました。

すると安政元年の三月に、亞米利加の軍艦が下田へ來ました。松陰は此の時こそと喜んで、門弟の澁木重輔と二人、急ぎ下田へ出かけました。海岸に

立つて沖の方を見ると、巍然として山の如き軍艦が浮んでゐる。二人は胸を躍らせました。さうして或る夜小舟に乘つて米艦に到り、外國へ渡りたいといふ其の志を話しました。けれども艦長は、二人の請を肯かずして、其のまま押戻してしまひました。

尙其の上に、其の事を幕府へ知らせました。幕府の役人は直ちに二人を捕へて江戸傳馬町の獄に入れ、佐久間象山までも囚へました。象山は間もなく宥され、二人は長州藩主毛利侯の願に因りて國へ送られました。重輔は藩主に願つて父母に逢つた後ち、潔く腹搔切つて死にました。松陰は一年ほど牢屋の中にゐて、後ち家に歸ることを許されますと、松下塾を開いて、多くの弟子を敎へました。久坂通武、高杉晉作、品川彌次郎、伊藤博文などは、皆な其のときの弟子であります。

安政五年四月、幕府では井伊直弼が大老となりました。直弼は朝廷のお許しを俟たずに、米國公使ハルリスと條約を取結び、港を開いて交易を始める

ことゝしました。尊王攘夷の論が一層八釜しくなつて、各藩の志士は京都に集まり、盛に直弼を攻撃しました。乃で直弼は間部詮勝を京都に遣はし、それらの志士六七十人を捕へさせました。其の中には、安藤帶刀、賴三樹三郎橋本左内、鵜飼吉右衛門などいふ勤王家がありました。西郷隆盛や僧月照は京都を逃げ出して九州に走り、後ち月照は海に溺れて死にました。

松陰は其のとき國にをりましたが、之を聞くと、如何にも腹が立つて堪りません。遂に覺悟を定めて京都に上り、間部詮勝を刺さうとしました。けれども近寄る機がなくて、空しく國へと立歸りました。

やがて其の年も暮れて安政六年になると、幕府は長州藩に命じて、松陰を江戸へ送らせ、いろ〳〵吟味をしました。最早や命を捨てゝゐた松陰は、我から進んで、間部詮勝を殺さうとしたことを自白しました。罪は忽ち決まり年の十月二十七日といふに、幕府は松陰を小塚原へ引出して、首を刎ねてしまひました。松陰の年は二十九歳、

親を思ふ心にまさる親心、
今日のおとづれ何と聞くらん。

といふ辭世を遺しました。

三條實美

――中興の皇猷を贊く

三條實美は贈右大臣實萬の子で、天保八年の二月に生れました。夙くから朝官となり、文久二年十一月には、勅使として江戸に下り、幕府に攘夷の事を迫りました。幕府は從來勅使を臣下の如くに待遇ひましたが、實美は久しく之を憤つてをりましたから、反對に將軍を臣下のやうに待遇ひました。實美が朝廷を重んじた志、其の氣象のしつかりしてゐたことが解ります。實美は其の時二十六歳でありました。

當時朝廷の役人は、大概皆攘夷論を抱いてをりました。實美もやはり然うでした。だから天子樣（孝明天皇）御自身に外國の船や外國人を御征伐あら

せられるやうと申上げ、天子様もそれを御聽許になつて、文久三年の秋、愈愈天皇御親征といふことになりました。ところが其の間際に、朝廷の御相談が俄に變つて、實美の攘夷論とは反對の、公武合體論が勝を占めました。乃で實美は同志の公卿六人と共に、長州へ下りました。それは八月十九日のこと、世に七卿落と申します。

慶應二年の暮に、孝明天皇は崩御になつて、翌年正月明治天皇が御即位遊ばすと、年の十二月實美等七卿は、免されて京都へ戻りました。戻つた其の日に議定といふ役に仰せつけられ、岩倉具視と力を併せて、明治維新の大業をお輔けしました。

明治四年實美は太政大臣に任ぜられました。太政大臣は即ち今の内閣總理大臣で、まことに重い役なのであります。爾後明治十八年迄此の役をつとめました。其のころ天子様は、屢々各地へ行幸になりましたが、其の都度御不在中の政治を實美にお任せになりました。御信任が深かつたのであります。

明治二十四年の二月、實美は病氣に罹り、最早や危く見えました。天子様はひどく御宸憂あらせられて、月の二十八日、其の邸へ行幸になつて病氣を問はれ、正一位を授け、且つ有がたい勅を賜はりました。實美は其の日年五十五を以て死にました。天子様は深く之をお悼みなされて、特に國葬の禮を賜ひ、三日間の廢朝を仰せ出されました。

岩倉具視——旋轉の偉業を贊く

岩倉具視は堀川前中納言康親の子で、幼時岩倉具慶に養はれ、其の家を嗣いだのであります。具視の若いころは、外國問題の最も騷がしい時分でした安政五年幕府が老中堀田正篤を遣はして、亞米利加と條約を結ぶことの勅許を請はせたとき、具視は中山忠能等と相談の上、書面を朝廷に上つて、勅許になつては可けませぬと、熱心に申上げました。朝廷に於ては、其の言をお

用ひになつて、幕府の請を斥けられました。

其のときの具視は、論夷論者でありましたが、後には公武合體論者となり文久元年和宮が將軍家へ御降嫁なさるについて、大に力を盡しました。ところが當時は攘夷論の盛なときでしたから、公武合體論者の具視は、幕府を佐ける姦人だといふ疑を受け、遂には京都を逐はれ、髪を剃して隱居しなければならぬことゝなりました。けれども具視は、少しもそれを怨みに思はず、密に木戸孝允、大久保利通、西鄕隆盛、坂本龍馬などゝ相談して、幕府を倒し政權を朝廷に取戻す謀を凝しました。

慶應三年明治天皇御踐祚と共に、具視は罪を免されて、再び朝廷に仕へることゝなりました。すると間もなく、將軍慶喜が政權を奉還しましたから、逸早く參內して天子樣に申上げ、王政復古の大號令をお出しなさるやうに計ひました。さうして其の年の十二月に、三條實美も京都へ歸つて來ましたから、共々力を協せて天子樣を輔翼申上げ、維新の大業に就いて、大に力を盡

しました。

明治四年實美が太政大臣になると、具視は右大臣となり、條約改正準備のため、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文などを隨へて歐米各國を巡りました明治六年の秋歸朝すると、恰度其のときは、西鄕隆盛、副島種臣、板垣退介などが、征韓論を唱へてゐる眞最中でしたから、具視はそれに反對して、其の議論を打潰してしまひました。隆盛は參議の役を辭いて國へ歸り、後には西南戰爭を始めました。種臣、退介なども、隆盛と一緒に辭職しました。

具視は明治十六年の七月、病氣のために死にました。死ぬ前、二度までもお見舞なされ、死ぬと國葬の禮を賜ひ、三日の間御廢朝になりました。明治十八年二周年祭のときには、正一位をお贈りなされました。

右述べた實美と具視の二人は、維新の功臣中最も功のあつた人で、明治天皇も此の二人を、最も深く御信任になりました。或る人はいひました、

『明治天皇が最も重んじなされたのは岩倉具視で、最も御寵愛になつたのは

三條實美であつた』。

木戸孝允——夙に心を皇室に傾く

木戸孝允は長州藩の士であります。初めの名は桂小五郎、後ち藩主の命によつて木戸準一郎といひ、更に孝允と改めました。維新前尊王攘夷の論の喧しい頃、孝允も攘夷論を執り、京都へ出て、公卿や諸藩の間を奔走しましたところが、文久三年、長州藩は俄に勢力を失つて、京都から斥けられることとなり、孝允も逃れて國へ歸りました。

其のとき土佐藩の士に、坂本龍馬といふ人がありました。幕府を倒して攘夷の事を行ふには、薩州長州の二藩が連合して、力を協せるのでなければ駄目であると、然う思つて、先づ薩州の西郷隆盛、大久保利通に話し、又た長州の木戸孝允に話しました。孝允はそれに賛成して、藩主毛利侯に申上げると、毛利侯は孝允を使として薩州侯の邸へ赴かせ、其の相談をさせました。

それまで薩長の間は仲が惡かつたのですが、此に於て連合が成り、共々力を協せることゝなりました。

其のころ、各藩中最も強かつたのは、薩長の二藩であります。それが連合したのですから、幕府の爲には由々しき大事で、爾後幕府の勢は次第に衰へ文久も過ぎ、元治も過ぎ、やがて慶應の三年となると、將軍慶喜は政權を返上して、遂に王政復古、明治維新の大業が成りました。

明治元年孝允は、薩州の大久保利通等と共に、參與の職に就きました。當時德川幕府は既に倒れて、政權は朝廷へ戻りましたけれども、まだ諸國には大名があつて、土地人民を私有してをりました。孝允はこれを殘念に思つて一日大久保利通に向ひ、

各藩共土地人民を朝廷へ奉還するのでなければ、眞個の王政復古とはいはれない』。

と話しました。利通も成るほどと賛成して、夫々藩主に說きました。すると

土佐肥前の二藩に於ても、同様の相談があつて、明治二年の正月薩長土肥の四藩が連合して、土地人民を奉還することゝなり、他の諸藩も之れに倣つて眞個の王政復古が出來上りました。

明治四年孝允は大久保利通等と共に、岩倉具視に從つて歐米各地を巡遊し明治六年に歸朝すると、西郷隆盛等の征韓論に反對し、明治七年臺灣征伐の議が起ると、それにも反對して職を辭し、國へ歸りました。孝允が征韓論や臺灣征伐に反對したのは、外國の事よりも、先づ日本の内を善く治めなければならぬと、然ういふ意見でゐたのであります。

明治七年の正月、孝允は再び出て參議に任じ、元老院、大審院を設けるとに力を盡し、地方官會議の開かれたときには、其の議長となりました。かくて引つゞき國政の事に骨折りましたが、明治十年西南の役が眞最中、五月二十五日京都の旅館に於て死にました。死ぬ前、天子様は態々其の旅館へ行幸遊ばされて、お見舞のお言葉を賜はりました。孝允の年は四十四でありました。

明治二十二年憲法發布のとき、天子様は勅使を孝允の墓へお遣しになり其の事を告げさせられました。といふのは、立憲政治は孝允平素の志であつたからであります。

大久保利通

鴻業を復古に策す

大久保利通は西郷隆盛と同じく薩摩の藩士で、初めの名は市藏、後に利通と改めたのであります。

文久の年以來、薩摩藩は會津桑名の二藩と共に兵を京都に入れ、皇居を護つてをりましたが、會津桑名は動もすると幕府の威光を笠に被て、他の諸藩を侮る振舞がありました。利通は深く之を憤り、長州藩と力を戮せて、幕府を討たうとしました。朝廷も密勅を薩長二藩に下して、幕府を討たせやうとなされましたが、慶應三年の十月、土佐藩主山内豐信の慫慂に因りて、將軍

慶喜が政權を返上しましたから、其の事無くして已みました。

慶應三年十二月、朝廷は王政復古の大號令をお發しになりました。それに就ては、利通の盡力が多かつたのであります。明治元年明治天皇は大坂に行幸になり、尋で東京へ行幸なされて、都をこゝに奠められましたが、それも利通の發意をお用ひになつたのでした。明治二年各藩が土地人民を朝廷へ奉還するに就いて、利通の骨折つたことは、前に木戸孝允の話の中に述べたとほりであります。

明治二年參議に任じ、四年岩倉右大臣に隨つて歐米を巡遊し、六年歸朝、主として西鄕隆盛等の征韓論に反對しました。七年一月江藤新平、島義勇などが、佐賀に亂を起したとき、之を鎭めたのは利通でした。七年臺灣征伐のときには、清國に使して彼の國の總理衙門と談判し、遂に償金五十萬兩を出させました。明治十年西南の役には、京都に在つて征討の事につとめました利通は木戸孝允と共に、維新以來明治の初年に於て、功の多かつた人であります。

然るに明治十一年五月十四日、朝廷へ出る途中で、加賀の人島田一郎等の爲めに、刺殺されました。年は四十九でした。天子樣は深く之をお悼みなされ、勅使を其の第に遣はして正二位右大臣を贈り、且つ有がたき勅語を賜はりました。

右の木戸孝允、大久保利通の二人に、西鄕隆盛を併せて、之を維新の三傑と申します。隆盛も明治維新の大功臣でありましたけれども、惜いかな明治十年西南の役のために、一時賊名を蒙り、ましたが、西鄕の眞意でないことは、天子樣はくよ御存じで、後に其の罪を赦されました。

北白川宮殿下——玉葉一片蕃地に墜つ

日清戰爭に敗れた清國は、明治二十八年四月十七日の媾和條約に於て臺灣を割き、戰爭もめでたく收まりましたが、臺灣の土匪共は、我が國に從はう

とはせず、却つて反抗しましたから、近衛師團長陸軍中將大勳位北白川宮能仁親王は、年の夏、近衛兵を率ゐて御渡海になり、之を御征伐をなされました。

先づ三貂角に御上陸、三貂大嶺といふ嶮しい山を、馬にも召さずお越えになり、降りしきる大雨を物ともせず、濡れに濡れてお進みになりました。士卒も之に感じて振ひ起ち、所々の壘から土匪共の射出す彈丸が、雨の如くに降りそゝぐ中を、怯まず臆せず進みました。宮殿下はいと賴母しげにこれを御覽になり、敵の本營に近づくのを待つて、突貫の號令をおかけになりました。すると川村少將、兒島大佐を始めとして、勇みに勇んだ近衛兵は、我れ先にと奮進し、賊の本營へ突き込みました。賊は一堪りもなく打破られて、或者は戰死を遂げ、或者は逃げ散り、或者は降參しました。勝誇つた我が軍は、こゝに勇ましく凱歌を奏げ、宮殿下には悠々として基隆城へお入りになりました。

次いで六月十日には臺北城を陷れ、七月には新竹を占領し、八月には彰化府と臺灣府とを定め、十月の初めつ方、臺南指してお進みになりました。十月といへば、內地では最早秋風の吹き初める頃ですけれども、臺灣ではまだ仲々暑いのであります。宮殿下は其の暑さをもお厭ひなく、晝は馬に跨り、夜は荒野に露營しつゝ、嶮しい道をお進みになつたのでした。

ところが、途中で御病氣にお罹りなされ、ひどくお苦しみの御容子でしたから、お供の人たちは心配して、一先づ東京へお歸りになつてはと、切りにお勸め申上げました。けれども宮殿下には、

『土匪を平げてしまはぬ中は、縱ひ臺灣の土となつても、士卒を殘して我の み歸ることは出來ぬ』。

と仰せられ、其の後は駕籠に召してお進みになりました。

忠勇なる我が軍は、宮殿下の御心に感じ入つて、愈々益々勇戰し、間もなく土匪を平げてしまひました。ところが宮殿下の御病氣は、其の頃一層お重

くなり、お供の人が、

『殿下、土匪も漸く平ぎました』。

と申上げるのを、いとお嬉しげにお聞きなされ、たゞ一聲、

『萬歳』。

と仰せられたまゝ、遂に薨去になりました。尊い皇族の御身を以て、風土の惡しき地へ御出征なされた上に、お命を陣中にお落しになつたことは、まことにお悼ましさの極みであります。

伊藤博文——望み一世に隆し

伊藤博文は舊長州藩士十藏の子で、初めの名は俊輔といひ、後ち博文と改めました。有名な吉田松陰の松下塾に學び、後桂小五郎に隨つて江戸へ出て各藩の志士等と交りました。最初はやはり攘夷論者で、文久二年には、井上聞多（今の侯爵井上馨）等と共に、品川御殿山なる英國公使館の燒打に出かけ、幾ほどもなく聞多等十五人と英國に渡り、倫敦大學に入りました。半年ほど經つと、長州藩では外國と戰爭を始めるといふことが聞えましたから、元治元年三月驚いて國に歸り、聞多と共々藩主にも說き外人にも話し、やうやく戰爭の騷ぎを收めました。

維新の後ち參與に任じ、明治三年歐米に使して財政の事を取調べ、翌四年歸ると間もなく、岩倉大使に隨つて、又々歐米に使し、明治六年歸朝の後は益々重く用ひられて、十一年大久保利通の後を繼いで內務卿となり、十三年參議となりました。

明治十四年になると、又々歐洲に使しました。それは憲法制度取調べの爲で、十六年に歸朝し、制度取調局の長となつて憲法の起草に力を盡し、それが出來上ると、二十一年新に設けられた樞密院の長となつて、憲法討議の事に從ひました。かくて憲法は確定し、二十二年に發布せられ、翌二十三年國會開設の運びとなりました。憲法が定められるについては、博文の功が最も

多かつたのであります。

其の間、明治十八年支那に使して、李鴻章と談判の上天津條約を結び、此の年始めて内閣が設けられると、第一次の内閣總理大臣となりました。

明治二十七八年の日清戰爭は、博文が内閣總理大臣の職に在る間の事で、此の戰役が我が國の連戰連勝に歸し、翌年李鴻章が講和の爲めに來たときには、外務大臣陸奥宗光と共に李鴻章と談判し、講和條約を取結びました。それまで勳一等伯爵でゐた博文は、功に依つて大勳位侯爵を授けられました。

明治三十三年には、政友會を組織して其の總裁となり、明治三十七八年日露戰役にも功があつて公爵を授けられ、三十八年韓國が日本の保護國となると、年の十二月統監に任ぜられて、韓國に赴きました。

明治四十三年韓國統監を辭して樞密院議長となり、同年十月滿州へ出かけハルビン停車場に於て、韓國人安重根の爲に射られ、わづか三十分餘りで死にました。此の事が聞へると、日本中誰一人之を惜まぬ者はありませんでしたが、天子樣にも深くお悼みになり、特に國葬の禮を賜ひ、其の日は廢朝、尙ほ從一位を授け、有がたき勅語を賜はりました。

乃木希典（上）——愛兒の戰死を賞す

明治天皇御大葬の當日、夫人と共に殉死を遂げて、至誠純忠の志をあらはした陸軍大將伯爵乃木希典は、舊山口藩士乃木希次の長男で、嘉永二年の十一月十一日、江戸麻布日ケ窪の毛利邸に於て、初めて呱々の聲を揚げました。十一歲の時、父母弟妹と共に國に歸り、長府の町端れの、小さな藁葺屋根の家に住んで、佗しい月日を送りました。一家六人が六疊二疊の二室に起臥したといふのですから、家の生計は可なり貧しかつたのでありませう。

希典は明治元年佛式繰練を學ぶ爲に、伏見御親兵々營に入り、維新の際戰功を樹て、四年陸軍少佐に任ぜられ、八年熊本鎭臺第十四聯隊長心得として小倉へ赴任しました。するとそれから三年目に西南戰爭が起り、城將谷干城

の命に因つて、希典は聯隊を率ゐて熊本城に入らうとする途中、賊軍に出會つてこゝに劇しき戰爭を始め、不幸にも敗軍となつて、聯隊旗をさへ賊の手に奪れました。此の事は希典の最も殘念に思つた事で、爾來三十幾年の間一日として之を忘れず、殉死の一原因も亦た此に在つたのであります。

西南戰爭の後ち、希典は次第に出世して、歩兵第十一旅團長、近衞歩兵第二旅團長、第二師團長、臺灣總督、第十一師團長に歷任し、日淸戰役には、第一旅團長として出征し、金州旅順に功を樹てましたが、希典が最も大なる功を樹て、武名を世界に轟かしたのは、日露戰役のときでした。

日露戰役には、希典は初め留守近衞師團長となり、三十七年六月陸軍大將に任じ、第三軍司令官に補せられて出征、旅順の方へ向ひました。旅順は露西亞が十年もかゝつて固めた處で、之を攻陷すといふことは、容易の事ではありません。けれども希典は部下の士卒と苦樂を共にしつゝ、不撓不屈の精神を以て軍に從ひましたから、さしもの旅順も陷つて、翌三十八年の一月一日に敵將ステツセルは、旅順開城の事を申込んで來ました。此に於て希典は鬼將軍と呼ばれ、世界各國の人皆な其の勇武に驚きました。

然し希典の偉かつた點は、忠君愛國の心に富んでゐたことであります。希典には二人の子があつて、兄を勝典弟を保典といひ、共に出征して、共に戰死しました。勝典は南山の戰に戰死したのでしたが、それを聞いた希典は、

『國家の爲めに善く死んだ』。

と賞め、

『然し家から三つの柩を出さない間は、葬式は營まないのだ』。

といつて、少しも悲みませんでした。忠君愛國の心に富んだ希典は、君のため國のために死ぬことを、寧ろ幸福と考へたのであります。

乃木希典（下）——一死以て君に殉ず

二〇三高地の戰は、劇しい旅順の戰の中でも、最も劇しい戰でした。敵軍

が頑固に構へて、味方には死傷者が澤山に出來、何れが勝とも定まらぬ劇戰の眞最中、希典は馬を戰場に乘り出して、戰爭の模樣を觀てをりますと、そこへ傳令の騎兵が駈けつけて、

『唯今乃木少尉が戰死されました』。

と知らせて來ました。乃木少尉といふのは、希典の次男保典のことであります。

先には長男を失ひ、今又た次男を失くした希典の心中は何んなであらうかと思ふと、並居る將校等は、何と慰むべき辭もなく、たゞ顏見合するばかりでした。するとそこへ來合せてゐた兒玉大將が口を開いて、

『乃木はいゝことをした』。

といひ、希典は傳令の騎兵にたゞ一言、

『御苦勞であつた』。

と慰勞の言を與へた切り、相變らず戰爭の模樣を見つめてをりました。

二〇三高地が首尾よく我が手に歸したのち、部下の將卒等は希典の心を推料つて、保典の死骸をビスケットの空箱に納め、出來るだけ丁寧に葬らうとした。すると希典はそれを止めて、

『俺の子だからといつて、特更ら丁寧に扱つてはならぬ。幾萬の忠死者は何うするのだ』。

と、其の死骸を其のまゝ戰場へ捨てさせてしまひました。

旅順が陷ると希典は奉天の會戰に加はつて、又々大勝利を得、其の功に因つて、戰爭後勳一等に叙し、旭日大綬章及び金鵄勳章を賜ひ、尋で從二位に叙し、伯爵を授けられました。明治四十年一月以來學習院長の職に在り、明治四十四年東伏見宮殿下に隨つて、東鄕大將と共に英國皇帝の戴冠式に參列し、歸途に歐洲各國を巡り、到る處大歡迎を受けました。

希典は平素明治天皇のために、一命を捧げる考へでをりました。然るに其の明治天皇は、明治四十五年七月二十日以來、重き御病氣に罹らせられ、月

の三十日午前零時四十三分といふに、遂に崩御になりましたので、希典の悲嘆は一通りでなく、此に殉死の覺悟を定めました。かくて大正元年九月十三日は天皇御大葬の當日、靈柩が宮城を出御になる午後八時、大内山の空に響く號砲の音を耳にすると直ぐ、希典は腹搔さ切り、夫人は胸を貫いて、壯烈極まる殉死を遂げたのであります。

其のとき希典は、

うつし世を神さりましゝ大君の、
みあと慕ひて我はゆくなり。

といふ辭世を遺し、夫人は、

出でまして還ります日のなしと聞く、
今日の御幸に逢ふぞ悲しき。

といふ和歌を遺じました。

日本忠臣傳（終）

大正二年一月十日印刷
同　年一月廿五日發行

不許複製

正價金拾五錢

編輯兼發行者　東京市日本橋區鐵砲町三番地　榊原友吉
發行者　東京市日本橋區大傳馬鹽町十七番地　魚住嘉三郎
印刷者　東京市神田區松田町九番地　三浦幸三郎

發行所
東京市日本橋區鐵砲町三番地　榊原文盛堂
（電話番號浪花三三二二）
（振替口座東京三〇九〇）
東京市日本橋區大傳馬鹽町十七番地　魚住書店

271
308

終